

# 足立史談

## 第582号

2016年8月15日

足立区教育委員会  
足立史談編集局  
足立区立郷土博物館内

〒120-0001  
東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

(28-308)

### 船津久五郎(文淵)の母、

### 糸子の周辺の事情

伊澤隆男

三月十三日から五月二十二日まで開催された、「美と知性の宝庫 足立―酒井抱一・谷文晁とその弟子たち―」において、沼田船津家第七代の船津久五

郎(文淵)に関する資料が谷文晁一門の貴重な資料とともに多く出展され、初めて目にする貴重な資料とともに今後の研究がこれらの資料により一段と深められることを期待している。



上・史跡豪族河内家之墓  
下・「河内先生追悼碑」

足立区の船津家でも川口市の船津家でも、これまで沼田船津家の七代目船津久五郎(文淵)が谷文晁の弟子となり、谷文晁が沼田の船津家を気に入って度々逗

留したということ、谷文晁の作品が多く残されていた(明治時代に船津静作・船津輪助親子が古物商に騙されて谷文晁の作品を根こそぎ買われてしまった)ことは知られていたが、船津久五郎の関連資料やその作品の内容、価値などは一切わからなかった。

足立区立郷土博物館を中心とする今回の企画展に関連する調査研究により、今まで知られていなかった膨大な資料が、また資料の意味するものが明らかになったことは実に大きな成果であったと思われる。

今回の企画展に際して沼田船津家の代々について船津輪助の資料により文章を書かせていただいたが、その中で船津久五郎の母糸子とその実家、さらに糸子の再婚先の小針(こはり)家について今まで気付かなかったことが多々あったので、ここで改めてそのことについて書かせていただくことになった。

糸子の実家、代々竹ノ塚村の名主を務めた河内家と船津家のかかわりは、船津家三代目の船津徳右衛門重矩の三女「とみ」が竹ノ塚村河内権蔵の妻となつたときに始まっている。河内権蔵は河内家九代河内半蔵の子

で河内家十代目と思われる。さらに、船津家四代の船津徳右衛門重知(金松)の妻、留舞子(河内権蔵の娘?)が河内家から嫁いでいる。そして船津家五代目船津徳次郎重親に河内家十一代河内久蔵政武の長女「糸子」が嫁ぐことになる。

河内家はもと小田原北条氏の家臣の家柄で、北条氏直の家臣、河内但馬守常親が小田原北条氏滅亡後、竹ノ塚に土着し、嫡男の河内右近知親が初代となり、十三代の河内久蔵武胤が慶応四年に没して明治維新を迎えている。河内家の墓地は竹ノ塚にある西光院にあるが、佐伯住職の話によると、十三代の河内久蔵武胤の墓地は西光院には無く、八代久蔵、九代半蔵、十代権蔵、十一代久蔵、十二代久蔵の墓も西光院にはない。

河内家は十三代久蔵が慶応四年五月二日病に倒れた後、明治十七年に十三代河内久蔵の寺子屋の門人たちが久蔵の遺徳を偲び、「河内先生追悼碑」(足立区登録文化財)を西光院に建てた頃までは河内家の代々の墓地が境内の然るべき場所にあったと考えられるが、その後、河内家の衰へと西光院の事情で八代目以降の墓石が失われたものと考えられる。河内家初代から七代目あたりまでの古い墓石が並んでいる一角には、「史跡豪族河内家之墓」の表示がある。

糸子は船津徳次郎と結婚して清水家の夫婦養子になるが、徳次郎糸子夫婦が清水家の姑との折り合いが悪く、清水家を追い出され、生まれたばかりの久五郎を一時清水家に残して船津家五代目を継ぐことになった。間もなくして、夫の徳次郎が急逝してしまい、おそらく糸子が河内家に戻ったときに久五郎も河内家に引き取られることになったものと思われる。

河内家に糸子と久五郎親子が引き取られて二、三年後、糸子は相森(すぎのもり)神社の官司小針織部常直と再婚することとなった。

相森神社については社伝によれば、「本社は遠く、一千年の昔、武蔵野の原たりし時代の創建にして、天慶三年(九四〇)田原藤太秀郷(後



現在はビルの谷間になってしまった相森神社



相森神社と現在の神官 小針常昌氏  
小針家 18 代目

に藤原秀郷)平将門を追討せんと、常に信心厚き心から当社に詣で、戦勝を祈願し、下総の国に至り強敵を亡ぼす、これ偏に神助に依ることと、願望成就の報賞として、常に尊心せる、白銀の狐像を奉納す。(この白銀の狐像については小針官司は現存すると言っておられた)」とある。

相森神社は江戸の三森神社の一つであり、三社とも稲荷系の神社である。港区新橋の烏森神社、千代田区神田須田町の柳森神社、そして日本橋堀留町の相森神社である。三森神社は江戸開拓の祖とも言える太田道灌が定めたといわれている。

糸子が再婚した小針織部常直は小針家が相森神社の神官になって十四代目である。

小針家はもともと小田原の北条氏

に仕えていたが北条氏滅亡後に相森神社の神官になっている。

このことについて相森神社の資料によれば、

「大織冠鎌足公(藤原鎌足)十七代安達右馬之充後、小針権三郎正貞は祖父小針主馬之助正純以来、相州小田原城主北条左京太夫氏直旗下なりけるが人皇百七代正親町天皇朝天正十八庚寅年、太閤平秀吉公のために小田原の城を落とされ、氏直落魄の後当社社務となりぬ、然るに関東御入国以来、市中の新社不残被為召上候得共、当社の儀は古跡に御座候故、地所拝領仕候、其後大猷院様(徳川家光)御代より御直支配、御触事奉承知候」と記載してあり、河内家と同様小田原北条氏に仕え、北条氏が滅びた後、それぞれの土地に土着した間柄である。

今回の企画展では、船津久五郎の注文帳や日記が展示され、それぞれ解説が進められているが、船津久五郎の母が嫁いだ小針家との密接な行き来が伺われる部分が多々見られた。

足立史談第578号に掲載された、「菜菔雑記 卷三」嘉永六年六月の記述、

「一 朝いそ早朝出立、小針八十九江戸江送り遣す、供谷次郎。八十九事、五月九日来逗留今四日迄、日数二十五日目にて帰府。」

にあるこの八十九は小針織部の息子

小針織部常徳ではないかと思われる。

船津久五郎の日記や注文帳には小針の名前が見受けられ、相森神社の天井絵や襖絵なども描いているようなので母の家である小針家と沼田の船津家は船津久五郎のときはかなりの行き来があったものと思われるが、八代目の徳廣や九代目静作の時代には段々疎遠になっていったものと思われる、また小針家や河内家ともそれぞれの事情で糸子や船津久五郎親子のことが忘れられていったものと思われる。

相森神社にあった船津久五郎の天井絵などは大正十二年九月一日の関東大震災ですべて失われてしまったとのことである。

(川口市郷土市会会員)

### 四箇領二十一ヶ所と 瓦大師 中

小川 政 秋

四箇領二十一ヶ所霊場に安置されている瓦製の弘法大師像について、調査により判明した事を紹介する。

霊場の一覧・所在地については前号を参照のこと。

一番 常善院(足立区大谷田一ノ三三ノ一五) 大師堂内には木製大師像を中心に、三体もの瓦大師像が祀られているが、二体は瓦屋さんの習



作との事。

**二番 西光院**（足立区中川三ノ二一）  
**二五**）瓦大師があつた事で、三番の札所は明治十七年完成の中川橋を渡り、金町観蔵寺へと行く水戸街道沿いの寺院と推定できる。

**四番 観蔵寺**（葛飾区東金町七ノ一）  
**二**）瓦大師は本堂内にあり、頭部にかんりの損傷が見られ、割れ目から後ろ側が見える程である。関東大震災で被災したものとされる。

（割れや亀裂などの損傷のあるものは、すべて同じ理由によると思われる）お顔が割れているせいか他の瓦大師像とは異なるようにも見える。

**五番** 五番札所は、聖徳寺へと向う岩槻街道沿いか、小向あたりの廃寺から遷座したものか不明だが、つく



四番 観蔵寺



五番 向山寺

ば市の向山寺（つくば市高見原二ノ一一ノ七）にあつた。像自体は、以前は三郷市の高洲（旧高須）にあつたとの事。また、明治三十五年発行の『新四国四ヶ領八十八ヶ所・弘法大師道順記』という小冊子に「是ヨリ右高須大師へ二十二丁」という道案内もあり、下新田稻荷神社（三郷市高州一丁目二八九）付近かと思われる。

**六番 元、聖徳寺**（葛飾区東水元二ノ二八ノ二五）天台宗寺院であり、廃寺となり昭和四年五月に本所業平橋より当地に移転してきた南蔵院に合併した。大師像は、平成二十七年

**七番 長傳寺**（葛飾区東水元三ノ一六ノ一一）大師像は不動堂内にあ



六番 元、聖徳寺  
(南蔵院)



十八番 元、光明寺  
(伊勢野公民館)

り、台座が無く札番は不明だが、寺院の位置からは、第七番と推定出来る。大師像の胸から裾にかけて亀裂補修の跡がみられる。

**八番 遍照院**（葛飾区水元五ノ五ノ三三）大師像は、大師堂内に他の大師像等と一緒に祀られている。

**九番 常楽寺**（三郷市戸ヶ崎二ノ〇一）大師像は、本堂内の位牌の立ち並ぶ棚の上に安置されており、かなり埃を被っている様に見える。五鈷杵の下から数珠にかけて影が見えるのは亀裂の為か。

**十番 西福寺**（三郷市戸ヶ崎二ノ六二ノ一）大師像は、常楽寺と同じ様な所に安置されているが、台座が無いので札番は推定。五鈷杵の下から数珠にかけて亀裂が見えるが、補修の跡はない。

**十三番 西善院**（三郷市花和田一八九）大師像は、「四箇領八十八箇所第四十番」の新しい大師像を祀る大師堂内の片隅に安置されている。お顔に数箇所小さな欠損が見られ、左裾のあたりに亀裂と補修の跡が見られる。

**十四番 密乗院**（三郷市彦江一ノ二〇七ノ一）大師像は、「四箇領八十八箇所第四十一番」の標札のかかる大師堂内に安置されている。五鈷杵の一部が欠損している。

**十六番 普門院**（八潮市二丁目二〇九）大師像は、「四箇領二十一所第

十六番」の標札が打ち付けられている大師堂内に安置され、台座の札番も十六である所から、この標札を根拠として、この霊場の名称を「四箇領二十一ヶ所」とした。

**十七番 普門寺**（八潮市南川崎四四〇）大師像は、大師堂内に厨子に入つた大師木像の隣に安置されている。右肩の付け根から膝上にかけて細い亀裂が見られる。

**十八番 元、光明寺**（八潮市伊勢野六六九）大師像は、「新四国四箇領八十八箇所第七十一番」の標石と東講の標札のある大師堂内に木製の両大師像と一緒に安置されている。

光明寺は廃寺で、跡地は伊勢野公民館となっているが、墓地が残っている。ここには、清水三十六人衆の一人、大瀬の半五郎の墓もある。

**十九番 宝光寺**（八潮市大瀬五三）大師像は、境内の大師堂に安置されている。右肩から臂の下にかけて、補修の跡が見られる。

**二十番 福蔵院**（八潮市古新田二三一）大師像は、明治十七年の弘法大師一千五十年御遠忌記念に造立された大師石像と一緒に、大師堂に安置されているが、顔面右側が潰れたようになり、首の部分にも補修した跡があり、右手の五鈷杵が欠損し、左手やその上の腹部にも補修の跡が見られる。

**二十一番 大光寺**（足立区六木三ノ

一〇ノ一二 大師像は、境内の「大師奉安殿」の修行大師像の後ろに八十九体の大師石像（ミニ四国）と共に安置されているが、首筋と左肩から膝にかけて補修の跡が見られる。

—つづく—  
(葛飾区在住)

千住の酒合戦と闘飲図巻(三)

佐藤 秀 樹

前号で、別本図巻の制作にあたり大田南畝が「後水鳥記」別本原稿を作成したと述べたが、流布本図巻制作の際も流布本原稿が作られた。

流布本は「さかしむるに、次の日辰のときに出立しとなん」の書漏れや見物客の表記が「屠龍公・文晁・鵬齋」となるほかに、類出する「さかづき」の表記が草稿の「盃」から「杯」に変更される。

目立たない箇所だが、門前の聯「不許悪客 下戸・理窟 入庵門 南山道人書」の南山道人書の下に草稿では「冊」の字のようなものがある。流布本図巻にはこの文字のようなものはないが、南畝の「後水鳥記」流布本原稿には存在したようである。

東京都立中央図書館蔵『後水鳥記』は、内容は流布本と同一だが「冊」の字のようなものが存在する。国立

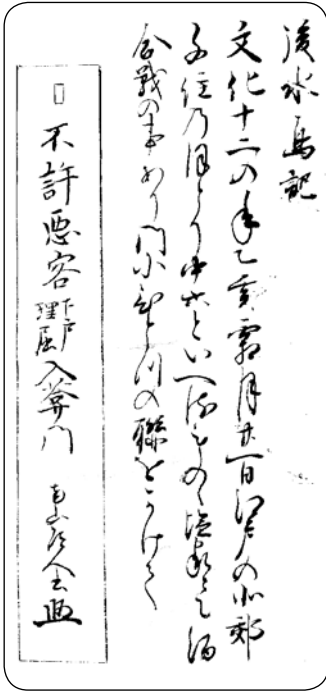
公文書館蔵『視聴草』所収「後水鳥記」では文字というより花押に似ている。同館蔵『落穂集』（筆者不詳）所収「後水鳥記」では花押にしか見えない。判読し難い「冊」の字のようなものが、転写の過程で花押に変化していったものと考えられる

『落穂集』所収の「後水鳥記」は内容にも変化がある。門前の聯「不許悪客 下戸・理窟 入庵門 南山道人書」が吊下げ看板のように四角で囲まれ、上部には吊下げ穴まで描かれ脚色される。

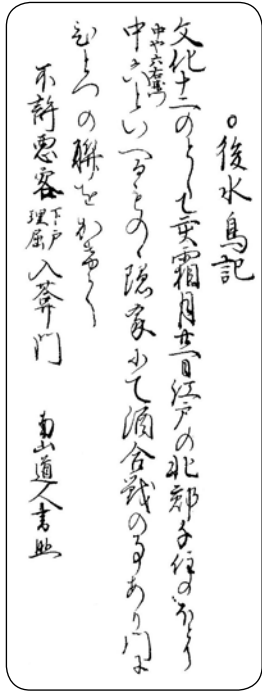
『視聴草』は幕臣の宮崎成身による大部の記録集で「後水鳥記」が記載される九集之十の目録には「高陽闘飲巻」に続いて「後水鳥記」と記される。「高陽闘飲巻」は南畝の「一

話一言」の「高陽闘飲巻」を写したものであることが、亀田鵬齋の「高陽闘飲序」に酒盃の「七斗」が書き漏れることからわかる。「後水鳥記」は前述のように「冊」の字とも花押とも見えるものがあることから図巻から写したのではない。流布本原稿を写したものである。

別本図巻の制作は南畝本人ではなく代筆者によるものとしたが、流布本も同様と考える。「冊」の字のようなもの、清書の際に省いた可能性もあるが、南畝本人が書写したのなら「さかしむるに、次の日辰のときに」出立しとなん」の書漏れには気付いたはずである。前の行の「人を」してこれを」で文が途切れるのは余りにも不自然である。新宿区立新宿



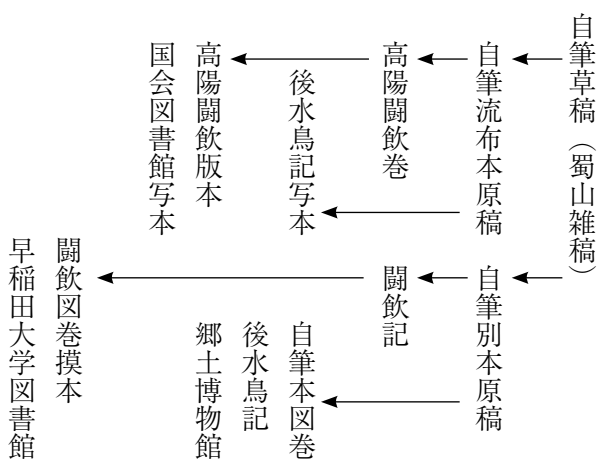
右：『落穂草』



左：『視聴草』

歴史博物館蔵の図巻には、当該箇所下部に「一行欠」の註記があり、書写した人が欠落に気付いている。南畝の流布本原稿から代筆者が清書したが、「冊」(かきもの)紙に書いたもの)の箇所を判読できずに書き漏らし、南畝の書き漏れはそのまま写したとみるのが自然である。

流布本原稿は貸し出され、多くの「後水鳥記」写本を生じさせたが、南畝の元へは戻らなかった。このため、別本図巻作成の際に改めて、草稿から別本原稿を作ったと考える。流布本では推敲のあとが見られるが、別本では草稿とほとんど同じであるうえ、酒盃の名称を一つ漏らしている。急いでいたのかもしれない。闘飲図巻の成立過程を改めてまとめてみると、次のようになる。



ニューヨーク本図巻を初めて見た際の疑問からスタートした闘飲図巻についての一考察である。(了)

(元郷土博物館職員)